

# 6月「Das Fahrrad」 アントニア・シュルト

1.自転車には主に二つの使い方があると思います。乗り物として、AからBへ移動するのに乗るか、遊び道具として、すなわち「楽しいから！」乗るかというのがあると思います。

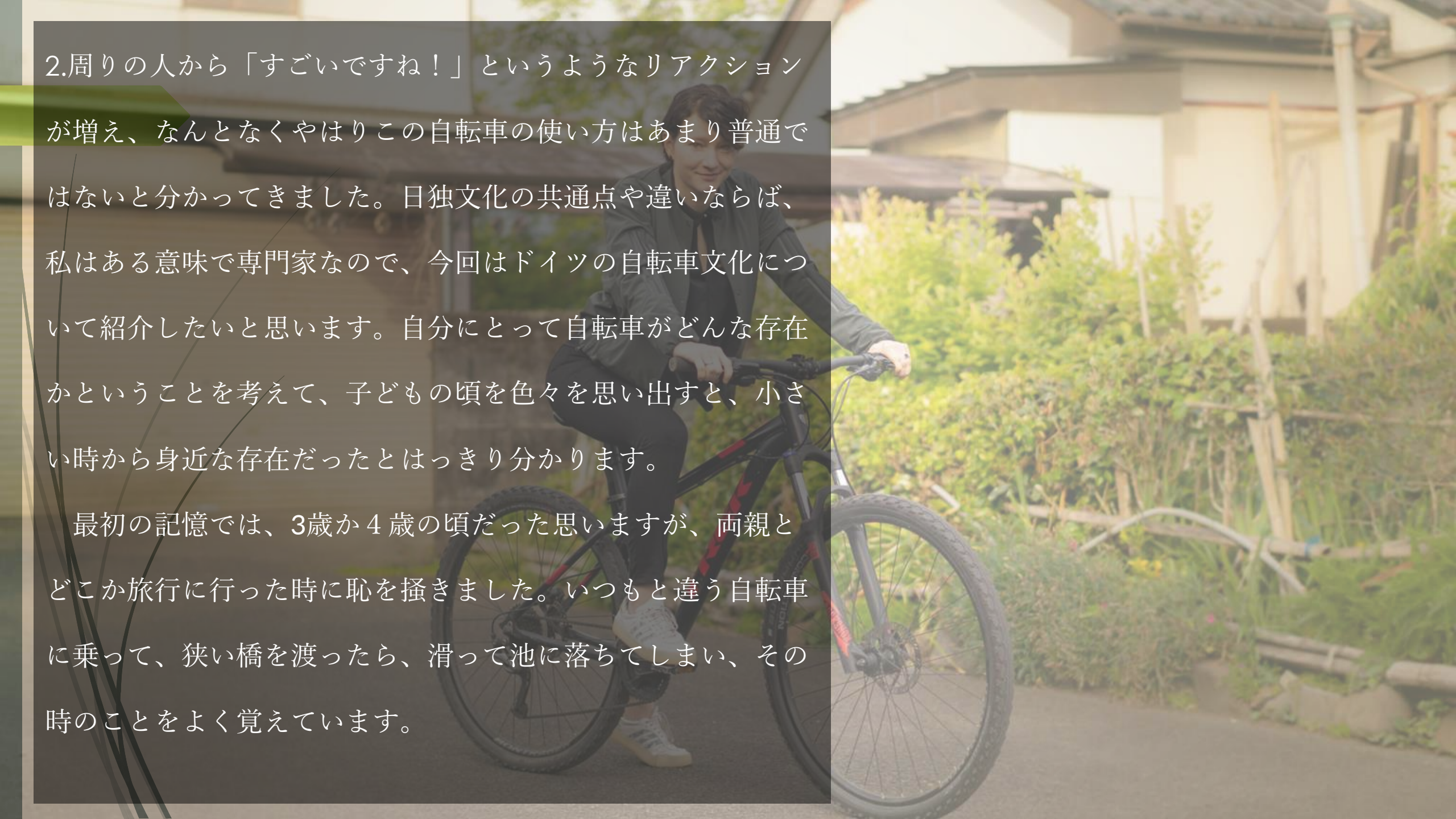
日本に来て間もなく、向こうで乗っていた自転車がドイツから郵送されてきました。届く前は小林の堤から市役所までの2.2kmを歩いて通勤していたので、その時は乗り物としてというのが大きかったと思います。

バラバラの状態が届いたので、組み立てなどを含めて、財政的に少し過大なプロセスだと思われるのかもしれませんが、数少ないドイツ人にとって「No 自転車、No ライフ」という方針で生きているのが過言ではないので、私には当たり前のことでした。

学生の頃、大阪の西成区に住んでいたことがあり、その町では自転車で移動する人が多くみられ、自転車に日常的に乗ることが日本でも普通だと推断しました。

小林市内の西小林へ引っ越したら、通勤の距離が少し長くなって、往復で13kmぐらいになりましたが、天気が許される限り、自転車で通勤することを続けて行きました。



A woman with dark hair, wearing a dark jacket and black pants, is riding a black and red mountain bike on a paved residential street. The background shows houses and lush green bushes. The scene is captured in a soft, slightly blurred style, suggesting a candid moment.

2.周りの人から「すごいですね！」というようなりアクションが増え、なんとなくやはりこの自転車の使い方はあまり普通ではないと分かってきました。日独文化の共通点や違いならば、私はある意味で専門家なので、今回はドイツの自転車文化について紹介したいと思います。自分にとって自転車がどんな存在かということを考えて、子どもの頃を色々を思い出すと、小さい時から身近な存在だったとはっきり分かります。

最初の記憶では、3歳か4歳の頃だったと思いますが、両親とどこか旅行に行った時に恥を掻きました。いつもと違う自転車に乗って、狭い橋を渡ったら、滑って池に落ちてしまい、その時のことをよく覚えています。

3.学校まではもちろん自転車、飼っていた馬のところまでの5kmも自転車で、夏に「アイスクリームを食べたい！」と親に訴えたら、「運動せずに食べるアイスクリームはおいしくないの、自転車で行きましょう！」と言われるのがよくあることでした。

一度、夏休みのとき、クラスメートのみんながどこか南イタリアへ旅行に行ったのに、私たちの5人家族は家から60kmぐらい離れている「Plöner See」という湖に自転車で行って、毎日、自転車に乗って周辺のあっちこっちへ遠足をしていました。

4.それが私の子どもの頃だったので、自転車で行ける距離であれば、車に乗ってはいけませんという考えが固定されています。私の世代のドイツ人ではそういう人が多いと思います。ガソリン代を節約できるという少しケチケチなスタンスもあるかもしれませんが、それより環境にやさしいし、身体を鍛えることにもなるので一石二鳥だというのがメインなのではないかなと思います。車が少ない小林市の下道だと、いつもの景色が新しい目でみられるし、最高に楽しいです。自分の町を自転車に乗って、再発見してみませんか。

